



?? これ何? ??

## 工場の不思議

岐阜セラツク製造所 鶉工場の建物の多くは、地面から約50cmほどの高さの土台の上に建てられています。もともと全ての建物が土台の上に建てられたわけではありません。中には、完成後しばらくしてから、建物ごと持ち上げるようにして土台を追加し、わざわざ底上げしているものもあります。なぜこのような造りになっているのでしょうか。

### Q.なぜ工場内の建物は全部底上げされているの？

岐阜県は古くから「飛山濃水」、飛騨は山、美濃は水、という代名詞を持ち、その自然溢れる土壌は国内で広く知られていました。特に数多くの美しい河川は、人々の豊かな暮らしと産業の発展に貢献し、歴史小説家の司馬遼太郎もかつて「美濃を制するものは天下を制す」という言葉を残したほどだと言われています。しかし一方で、多くの河川は「水害を招きやすい」という一面も持っています。標高3,000mを超える飛騨の山々から流れた大量の水は、時に洪水という形で美濃の国の人々を襲いました。特に木曾三川と言われる、長良川、揖斐川、木曾川に囲まれた土地では度重なる氾濫に悩まされ、その度に新たな自然堤防に身を寄せる日々を送っていました。その後、木曾三川分流工事等の洪水対策が講じられ、今では岐阜県が水力エネルギー量 日本第一位(経済産業省調)となるほど、川と共に生きる生活環境を築き上げてきました。



### 昭和51年 長良川決壊「9.12水害」発生

しかし、洪水の脅威が完全に消え去ったわけではありません。昭和51年9月12日、大規模豪雨による洪水が岐阜県各地で発生し、当時すでに稼働していた当社の鶉工場も被害に遭いました。ひとの膝下まで浸かるほどの浸水で、工場の復旧のため出勤した社員はボートを使って工場内を移動したと言います。このときまだ土台を設けていなかった当社の設備、製品はともに浸水被害に遭い、完全な復旧までには長い時間を要しました。豊かな水源は、我々のような製造業にとって非常に重要です。しかし同時に、水害のリスクもあるということを念頭に、適した工場設計をしなければならない。万が一のときの対応を考える前に、万が一を防ぐことを考えなければならない。それを痛感した出来事となり、当社は工場設計の見直しに乗り出すこととなります。



工場をボートで移動する社員



冠水した道を歩く人々



冠水の高さを示す社員  
冠水の位置まで背後の荷物が変色しています。



沈んだ町を駆ける工事車両

ということで、答えは

**A.洪水による冠水被害に備えるため**

でした！

## おそろいの腕章？



社員は常にこの腕章を携帯しています。湿度が低いほど警戒色になっていくデザインです。

社員の腕には揃いの腕章がつけられています。書かれた数字と色が異なる4種類の腕章を、事務所からの発令を元に付け替えます。この腕章はその時々湿度を表しており、発火の原因となる静電気への警戒を、お互いに喚起できるツールとして用いられています。30、20の低い湿度警報が出た際には、各現場では散水やスプリンクラーなどによる加湿行動をとります。

酸素



熱源

可燃物

## 水漏れ?! 道端のホースの正体

年々夏の暑さが厳しくなっていきますね。各企業では暑さ対策として様々な取り組みを行っていますが、それは当社も同じです。高い外気温に加え、動き続けるプラントから発せられる熱。そんな過酷な環境で働く現場の社員ののために、この夏からスプリンクラーが用意されました。設備保全の担当社員がせっせと造ったお手製のスプリンクラーは、建屋の出入り口の上部から、そして工場内の道路の足元からシャワーを出し、実際に気温が下がり、見た目にもとても涼しくなりました。また、スプリンクラーによって加湿されることで、静電気が起きにくい環境になり、安全の面でも一役買っている働き者です。



上からだけでなく地面からもまくことで、散水の効果もあります。

## 数えきれないほどの避雷針!



工場に立つたくさんの避雷針

学校や商業施設でも、スラッと長く伸びる避雷針を見たことがありますよね。当社も避雷針は設置していますが、その数がとんでもなく多い! 当社に限らず、工場ではたくさんの建物それぞれに避雷針がついていることから、意識して見てみると数えきれないほどの避雷針を屋根の上に確認することができます。技術が発達し、様々なものが自動化され、AI、IoTといった言葉をよく耳にするようになりましたが、そんな機械化のリスクのひとつが落雷停電によるシステムトラブルです。万が一を想定した事前、事後の対策案を、ここでも考えていく必要があります。

こんなところにも!

# 工場の不思議

お客様に安定して製品をお送りするため、そして近隣の方々にご迷惑をおかけしないため、何より社員の安全を守るため。工場内には様々な工夫がなされています。過去の経験から学び、時にはお客様に習いながら、常により良い形を目指しています。今回はその一部をご紹介します!



安全の在り方とは時代によって変化していきます。技術の発達により、より安全な道具が普及することもあれば、新たに生まれるリスクやトラブルもあります。過去に100点だった対策が、その後も100点であり続けることはできません。過去の経験や歴史を敬いながらも、それが絶対だと思わず、より良いものを求めていくことが、安全においても重要なのです。